

郷里における毛谷村六助と論介

——福岡県郷土紙「かみつの」をめぐって

岩谷めぐみ

(一)「かみつの」と毛谷村六助

説話の研究者には、学術的に研究に携わる人もいれば、地元の歴史や伝説などを収集し整理する郷土史家もいる。中央の研究者の研究成果は学会やシンポジウム、論文集などによって比較的目的にすることが容易であるが、地元根差した郷土史家の研究は埋もれたままになることもしばしばである。この度取り上げる資料「かみつの」は福岡県田川郡添田町上津野で地区住民向けに発行されたミニコミ紙であるが、そこには極めて興味深い内容が見出される。

「かみつの」との筆者の出会いはいは偶然である。以前より研究のテーマとしている、文禄慶長の役のヒーローとヒロインである毛谷村六助と韓国の官妓論介との関わりを探る過程でのことである。福岡県と大分県の県境に位置する英彦山の麓の小さな村の樵に過ぎなかった毛谷村六助が、壬辰戦争に加藤清正の家臣として出征したことがきっかけになり、歌舞伎や浄瑠璃では描ききれな

かった新たな説話が発生していた。芝居『彦山権現誓助剣』の主人公である毛谷村六助の故郷であるとされている彦山の麓を訪れた際、案内をしてくれた渡壁氏の「毛谷村六助の許婚の妹であるお菊の縁の松があつて、それについて書かれたものがある」との一言で、その説話に接することが出来たのであった。「かみつの」は、添田町津野在住の元小学校長、園田治氏が昭和三五年七月一日にB四判のガリ版刷り「上津野公民館分館便り」として第一号を発行して以来、月一回のペースで数十年も続いている。「かみつの」には、近隣の行事や周辺の話題を掲載する一方、「郷土研究」と称して郷土の伝説などを調べて連載している。地元の人々の毛谷村六助に対する眼差しをうかがえる資料と言えよう。

ここでは、伝説の主人公でありながら、なおも生き続けている毛谷村六助像を、上記の新たに入手し得た郷土史家の資料などから考察することにした。

(二)「お菊の松」

「かみつの」における、お菊の縁の松についての連載は、「お菊の松」と称して、昭和五五年四月（No.二三五）から六三年九月（No.三三七）（五七回）までとなっている。また、内容は、①毛谷村六助が芝居などで親しまれている吉岡一味斉の仇討ちの助太刀をする本筋、②後日談―朝鮮出征の話―、③あらすじ、そして④「お菊の松」周辺の開拓史、の四つに分けることができる。

まずは、昭和五五年四月（No.二三五）―昭和五八年八月（No.二七六）の三〇回で一段落した本筋①についてである。内容は、『彦山権現誓助剣』同様、父である吉岡一味斉が京極内匠の闇討ちにあい、その仇討ちのため、お園が妹お菊と一緒に仇を探して小倉まで来る。お菊が上津野の奥で癪のため動けなくなったので、お園が助けを呼びに行っている間、京極内匠の手の者によって返り討ちにあう。お菊がお園の帰りを待っている間、暗くなっているので近くの松の木に提灯をかけておいたことから、その松を『提灯掛けの松』とし、お菊はその松の根元に埋葬された。一方、お菊の埋葬ののち、お園は許婚であると言われている毛谷村六助の助太刀によって父と妹の仇討ちの本懐を遂げることで本筋は終わる。

暫く期間をおいて、再び「お菊の松」がその後の後日談②として連載されたのが昭和五九年で、それは昭和五九年一月（No.二九一）―六一年四月（No.三〇八）の四三回を以て終了した。内容としては、毛谷村六助改め貴田孫兵衛は、加藤清正に従い朝鮮に

出征したが、そこで不慮の死を遂げたと記されている。園田氏は、毛谷村六助は朝鮮の北東部国境付近でオランカイとの戦闘で死亡したのが正しいと述べながら、「ただ確実な記録がないため、六助をなぞの人物のように思われたりする」（四三回）としている。また、毛谷村六助の生存説が起こっているのは「あれほどの偉丈夫な毛谷村六助をむざむざ北鮮（ママ…岩谷注）の片隅で死なせたくないと思うので、それがいろいろと伝説を生む」と諸説を否定した。殊に、韓国で広く伝えられている、毛谷村六助が晋州城戦闘の祝賀宴の最中に、朝鮮の官妓論介の色香に惑わされて、無理心中に追い込まれたという説に対しては、「それはあくまで朝鮮の伝説であって、事実ではない」と述べながらも、一方で、論介との関わりに触れている。つまり、園田氏は毛谷村六助の最期を、地元に伝わる『毛谷村六助略縁起』の説話を採用せず、『清正記』のオランカイでの戦死説を取り込んでいるが、論介の無理心中説も、否定はしているものの、詳細を記しているのである。

(三) 毛谷村六助の死に関する説

では、ここで毛谷村六助の死に関する説に簡単に触れることとする。まず、前項で園田氏が参考にしたと考えられるオランカイとの戦闘の際に討ち死したという説であるが、それは、『清正記』に見出され、森本義太夫と貴田孫兵衛が、エンタン城の一番乗りのために口論したという記述があり、またそこには、貴田孫兵衛がオランカイの大男の剣によって討ち死したと記されている。また、『絵本太閤記』でも、『清正記』と同様に、オランカイでの戦

死説をとっている。つまり、一五九二年、加藤清正の軍勢は、威鏡道を過ぎ、朝鮮の国境より北隣のオランカイの地へ攻め入り、オランカイ軍は籠城する。清正の勇臣、森本義太夫と貴田孫兵衛が城の近くに進み出ると、城の中から二人の大男が出て来る。貴田孫兵衛が、刃渡り三尺あまりの槍を持って攻撃し、相手の兵を倒した。しかしながら、相手の兵は、

持ちたる剣を孫兵衛に投付て死にたり。去るにても運の極めの哀しさ、投たる剣孫兵衛が左の肩にぐさと立て、痛手なれば同じく倒れ伏したりける（中略）貴田孫兵衛は爰にて命を落としけり。^①

と、剣を孫兵衛に投付け、毛谷村六助―貴田孫兵衛―がオランカイとの戦闘で戦死したと記されている。

次に、朝鮮から戻ってきて天寿を全うしたという説がある。毛谷村六助の故郷である大分県下毛郡山国町槻木村の喜登家に伝わっている『毛谷村六助略縁起』^②に見出される。それは、毛谷村六助の父親は、浪人の佐竹勘兵衛で、六助は、訳あつて母親の名字である園部を名乗り、園部六助として文禄四年（一五九五）二七才の時に、「太閤の朝鮮征伐」で秀吉に随行したとしている。

そして、功績を立てた後、秀吉とともに凱旋し、故郷に帰郷し、六二歳（一六三一年）に病死したと記録されている。ただ、秀吉自身は朝鮮に出征していないので、毛谷村六助が秀吉と一緒に凱旋することは不可能である。それゆえ『毛谷村六助略縁起』の信憑性は極めて乏しいが、この縁起には、人々の毛谷村六助に生還して欲しかったという願望が含まれているように感じられる。この文書は「享保元丙申七月貳之 右明治三十五年五月再寫」と

なっているが、注目したいのが明治三五年（一九〇二）の年記である。毛谷村に近隣の有志らの協力で、毛谷村六助の墓が建立されたのが、まさしく明治三五年である。また、明治のこの頃は、日本中で毛谷村六助がもてはやされた時代である。^③それゆえ、この縁起の信憑性よりもむしろ、毛谷村六助の地元で、英雄であった毛谷村六助を慕う人々によって墓が建立されたことを時と同じくして『毛谷村六助略縁起』が「再寫」されたことに意義があるのではないだろうか。『毛谷村六助略縁起』の内容は、次のようなものであった。

六助ト申ハ佐竹勘兵衛之子。妻ハ今井村町人園部弥衛門ト申者ノ娘也。佐竹ハ元来浪人之身柄。実名ヲ隠シ、母方之苗字ヲ取り園部六助ト名乗り（中略）六助長成二十七才之頃、文禄四年乙未、太閤朝鮮征伐之御御供仕。古今無双の勇士の末、□□。終ニ討勝太閤御凱陣之御供申。当所へ帰り、六十才にて病死す。

次に、毛谷村六助が論介の無理心中によって悲運の最期を遂げたという説が初めて出現したのは、韓国が日本の植民地支配の下にあった一九三一年の「侠妓論介―死を以て貞節を守る」（『朝鮮仏教』八〇号）においてであった。そこに記述されているのは、次のような内容である。妓生論介は、晋州城の守将徐礼元の寵愛を受けていた。倭軍の侵攻で晋州城が陥落、そして論介の最愛の守将徐礼元も戦死する。論介は断崖の上に逃れて入水を図ろうと試みるが、加藤清正の家臣の将軍が論介の入水を止め、論介を口説こうとし、それに対し論介は、不意に乗じてその武将を抱き抱えて断崖から飛び降りた。さらにそこでは、その武将を毛谷村六

助として言及している。毛谷村六助が論介の心中相手として記されたのは、それが初めてである。『朝鮮仏教』は、一九二四年五月に朝鮮在住の日本の仏教界の著名な人々と親的な朝鮮の知識人等で構成された朝鮮仏教団の機関誌として発行されたものであり、その目的は、朝鮮における植民地政策を円滑に進めるための人々の教化であった。まだ実証できないが、朝鮮でも歌舞伎が上演されていた可能性があり、それが二人を結びつける契機となったのではないかと考えている。

また、玉川一郎は、一九四一年の『京城・鎮海・釜山』（新小説社）で、晋州にいる日本人の小学生の口を借りて、次のように毛谷村六助の名前に言及している。

「加藤清正が此処に攻めて来た時に、どうしてもこの河（南江・岩谷注）がわたれなくて困ったそうだよ。ようやく筏を作つて、夜、渡ったそうだが」（中略）「守る方にも仲々勇ましいのが居たそうだ。清正の家来で豪傑と呼ばれた毛谷村六助が（中略）」「ふうん、先生、その先知つてるわ。毛谷村六助が妓生にだまされよつて、抱きつかれたまんまこの矗石樓から南江にはまりよつて、溺れよつたんや。（以下略）」

つまり、論介によつて無理心中に追い込まれた倭将として毛谷村六助の名前が浮上したのは、日本統治下の朝鮮半島においてであるが、発端となったのは日本と縁のある『朝鮮仏教』と『京城・鎮海・釜山』等であるゆえ、それが必ずしも韓国で発生した説であつたとは言い難い。

因みに、太平洋戦争後、韓国で毛谷村六助の名前を最初に登場させたのは、一九四六年の朴鐘和による「論介」（『新世代』）で

ある。朴鐘和は、「六助は六尺長身で広い胸板に日本刀を差して高らかに笑つていた。敵つゝ額には刀傷が三つもあつた。六助というのは又の名を貴田統治とし、日本の剣客として有名な長州人の吉岡一味斎の弟子である。後に一味斎は剣客京極内匠というものの嫉妬により暗殺され（中略）」と、毛谷村六助を紹介し、仇討ちの話にまで触れながら毛谷村六助が如何に立派な人であつたのかを述べた。さらに、「倭将六助は片言の韓国語で論介に話かけた」と続け、論介が毛谷村六助を選んだ理由を「論介は毛谷村六助を加藤清正と勘違いした」と記している。

（四）「お菊の松」における論介の言及と韓国側資料

「お菊の松」に戻れば、「お菊の松」は四三回を以て終了したように思われたが、昭和六二年七月（No.三二三）～六三年二月（No.三三〇）の五〇回まで再び連載され、それまでのあらずじ③が述べられている。殊に、論介が毛谷村六助と無理心中を遂げた理由については、朱論介という才色兼備の妓生が「並み居る日本の武将、その中でも一と際太く逞しくりりしい六助を、敵の総大将加藤清正と思いがいしたのである。この男さえ亡きものにすれば仇は討てると心に決しながら（中略）」（五〇回）と、加藤清正と勘違いしての行動であるとしている。

一方、一九七六年に英彦山の麓に毛谷村六助と論介の墓を建てた上塚博男氏は、「毛谷村六助墓地建立の趣意文」で、次のように述べている。

夕日に赤々と燃える南江の水は血で真赤に染まり異様さを増

していた。その殺伐たる光景はあたかも生地獄の様相を呈し、戦役とは云えこれが人間のなせる業だろうか、因果とはいえ空しいものであると六助は岩の上より両眼を同じ心を静かに合掌して、今は無き両軍将兵の冥福に耽っていた。その背後よりしのびよっていた手が突然首に巻きついた。その十本の指には玉のついた指輪が夕日にきらりと光った。それは妓生論介の華奢な指であり、その細い手に満身の力をこめて六助の体を押した。瞬間六助は全身をもつて振り回したが足元が悪く滑り前にのめって論介と共に水中に没した。

武将とは云え、身に甲冑をまとい、然も戦いのあとの酒で酔いが早く廻り、銘酎して瞑想にふけていた時に不意をつかれて身をかかわすことができず、異国の人となった六助は大変憐れな最後（ママ）でした。^⑤

毛谷村は、韓国側の資料が主張するように、お酒に酔って、論介の色香に惑わされて無理心中を余儀なくされたのではなく、戦死した両国の将兵の冥福を祈っている最中に、論介に不意を突かれて、江に落ちて没したとしている。また、毛谷村六助に代わって、論介に償う気持ちを含めて供養を行うことによって、毛谷村が成仏できると述べている。

論介が、多くの武将の中で、なぜ毛谷村六助を無理心中の相手に選んだか、という問いに対して、その問いに関連する詳しい資料を見出すのは困難である。韓国側の資料に記されているのは、ある倭将が論介を誘惑したという内容のみである。つまり、相手が誰であるにせよ、それが倭軍の武将であれば、論介にとって十分であったと考えられていたのであろう。日本側の資料を見ると、

論介と毛谷村六助についての関係を示すものは、上塚氏と園田氏の資料を除けば、ほとんどない。これまでに刊行された毛谷村六助に関する文献では、例えば、毛谷村が仇討ちを遂げて朝鮮に出兵する話であり、話はそこで終わるものが大部分で、それ以外の記述として、毛谷村六助が朝鮮で亡くなったと簡単に記されているものがわずかにあるだけである。従って、当該の武将が毛谷村となった経緯について、日本側の資料で明らかにするのは、困難にならざるを得ない。論介による無理心中が毛谷村六助を相手としてなされたという説が初めて唱えられたのは、前述のように、一九三一年の「侠妓論介―死を以て貞節を守る」〔朝鮮仏教〕八〇号）においてであった。それはハングルで書かれたものであるが、韓国が日本に支配されていた時代のもので、その雑誌の性質からして、厳密に韓国側の資料とは言い難い。論介が、多くの武将の中で、なぜ毛谷村を無理心中の相手に選んだかについて、その答えの一つとして、前に触れた毛谷村が加藤清正に間違われて殺されたという説がある。朴鐘和氏が戦後、韓国でその説を唱えたことがあるが、日本では、『彦山権現誓助剣』と源を同じくする地元の伝説「お菊の松」で論介の話を取り上げた園田氏によって主張されている。日本の研究者が論介と毛谷村をテーマとした論文はあるものの、毛谷村の地元でそのテーマを直接取り上げたのは、園田氏が最初であり、それには、上塚氏が論介と毛谷村と一緒に祀ったことが、影響を与えているものと思われる。

(五)「お菊の松」以後の「かみつの」をめぐる出来事

さて、「かみつの」に戻ることにする。「お菊の松」は、昭和六年三月(No.三三二)～六三年九月(No.三三七)(五七回)で連載を終える。園田氏は、お菊の松の周辺における開拓の歴史④に触れながら、その延長線上で毛谷村六助と論介の墓について触れている。つまり、「お菊の松」の付近の土地を買収した田川市の実業家上塚博勇氏が、お菊の哀れな物語を知り、お菊とお園を祀る祠堂を建てる一方、毛谷村六助や論介との縁を知り、昭和四九年五月に韓国の晋州に赴き、現地での供養を行ったのであった。上塚博勇氏は、韓国の晋州を訪ね、英彦山に宝寿院を建立する。

また、「壬辰倭乱両国軍官民人合同慰霊碑」と、「朱論介之墓」、「毛谷村六助の墓」を建てた。落慶法要は一九七六年四月一日に行われ、日章旗と太極旗の双方が掲げられた。晋州市は、上塚博勇氏による、日韓の歴史的和解と論介や毛谷村六助の怨恨の解消を願う活動に共感して、一九七六年に、晋州市長の名前で彼に感謝状を授与する。その後一九八二年に至るまで在福岡韓国総領事館は「韓・日共同鎮魂祭」に副領事を派遣した。一方、韓国の在日居留民団は「英彦山義岩朱論介烈士墓碑永久保存会」(会長・梁承好)を発足させる。上塚博勇氏の建立した宝寿院の境内に、高さ三メートルの慈母観音像を建てる。また、一九九五年七月の除幕式を日韓共同で執り行い、論介の慰霊祭を継続して行うことを決定した。

以上のことに触れ、園田氏は、「郷土の皆さんもぜひ一度はこ

の墓に参り、上塚氏の厚意を知って頂きたい」としながら、人々への毛谷村六助の墓参りを勧めている。

(六)「お菊の松」における毛谷村六助像

結局、「お菊の松」で推察できる園田氏の毛谷村六助像はいかなるものであったのだろうか。「幼い頃、父に死に別れ母と二人暮らし、貧しいながらも親子むつましく楽しい生活だった。母は信心深く(中略)六助は英彦山を特に信仰し年に二三度は絶頂の上宮にも登っていた」(六回)という記述からすれば、貧しいながらも信仰心の厚い人物として描かれている。また、毛谷村六助が豊前坊天狗より色々の術を学び、さらに教順寺に入門し、四書五経はもちろん論語を暗唱したりして学問の勉強も怠らなかった、という事にも触れられている。つまり、英彦山の樵に過ぎなかった毛谷村六助が、文武両道に優れた人物として成長したわけだ、園田氏が毛谷村六助像に対して強調したのは武芸が優れたことだけではなく、むしろ孝行者としての姿である。毛谷村六助の人物や技量が気に入った小倉城主の立花統虎が何度も士官することを勧めたが、毛谷村は母親と離れることを嫌い、悉く士官を拒否している。

そのような毛谷村六助の死の状況について、園田氏が諸説の中からオランカイでの戦死説を選択したのは、生きて帰郷して天寿を遂げたことよりも、戦さでの死が、武将としての毛谷村六助に相応しい最期であったと思われるからではないだろうか。ましてや、朝鮮で官妓の色香に惑わされて無理心中に追い込まれた説

は論外としたのであろう。しかしながら、園田氏は、同時に論介による無理心中説を完全に否定したわけではないものと考えられる。なぜならば、園田氏は、論介の無理心中説に言及しながらも、論介が毛谷村六助を選んだ理由として、毛谷村が、他でもない勇猛な加藤清正に勘違いされたことにしているからである。つまり、加藤清正に匹敵するような人物として毛谷村六助を取り上げていると言えよう。このような説は毛谷村六助関連の資料を収集して編纂した芦馬氏も同様である⁷⁾。

(七) 結語

以上、添田町上津野のミニコミ紙の「かみつの」の「お菊の松」を取り上げて、その中に見出される毛谷村六助像を辿ってみた。

内容的には信憑性に乏しい記述などもあるが、毛谷村六助の地元で取り上げられたということに意義がある。もともと日本では毛谷村六助に関する文献では、論介との関係について触れられたものはなかった。日本による韓国の植民地統治時代に、朝鮮半島で初めて、論介と毛谷村六助の関係が記述され、毛谷村六助が論介による無理心中に追い込まれたということになった。その説を黙殺するのではなく、園田氏は丁寧にとりあげた上で、その説を否定しているのであるが、しかしながら、否定しつつも、その説にそって毛谷村六助像を別の側面から照らし出そうとしている。加藤清正と勘違いされるほどの武将であったとすることで、結局、園田氏は、論介と毛谷村六助の関係が存在するという説をはからずも首肯しているのである。

注

(1) 引用は塚本哲三編『絵本太閤記』下(有朋堂書店、一九二七年)による。

(2) 『毛谷村六助略縁起』原本を入手することが出来なかったの
で、芦馬豊雲編『郷土 田川 「史録」 毛谷村六助「貴田孫兵衛」伝』(吟詠道無相豊雲流総本部、一九九一年)を参照した。

(3)

年	歌舞伎	浄瑠璃	年	歌舞伎	浄瑠璃
1849	4	2	1908	10	0
1857	4	2	1909	5	1
1859	3	3	1910	6	0
1867	3	3	1911	11	1
1870	3	0	1912	10	0
1876	7	0	1913	5	0
1878	5	1	1914	4	1
1880	5	0	1915	3	0
1890	5	1	1916	3	0
1891	4	0	1917	4	2
1896	5	0	1918	3	0
1897	5	1	1919	3	0
1898	6	0	1920	9	1
1899	5	2	1921	4	0
1902	5	1	1922	3	1
1903	6	0	1923	5	0
1904	6	1	1924	4	1
1905	8	1	1925	6	1
1906	5	0	1927	4	1
1907	5	1	1935	4	0

(近代における『彦山権現誓助剣』の主要上演回数)

国立劇場上演資料集『通し狂言 彦山権現誓助剣』、国立劇場調査育成部調査資料課編 二〇〇二年一月、国立劇場上演資料集『文楽 彦山権現誓助剣』国立劇場芸能調査資料室 二〇〇〇年一月二月を参考に岩谷が表を作成。

- 表のように、『彦山権現誓助剣』は、平均的に年三回以上は上演されたが、それが著しく増加したのが、一九〇八年から一九一二年の間である。毎月のように日本のどこかで『彦山権現誓助剣』が公演されていた。演目としては、一段の内、毛谷村六助が、吉岡の妻子の助太刀をして仇討ちを成功させる「毛谷村」の段が、最も多く公演されている。毛谷村六助が、そのように人々から脚光を浴びるようになったのは、時代の状況と関係があるであろう。最も多く演じられたのは一九〇八年であり、それは日本が韓国を併合する二年前である。
- (4) 玉川一郎『京城・鎮海・釜山』（新小説社、一九四一年）
- (5) (2) 中の『郷土 田川 「史録」 毛谷村六助「貴田孫兵衛」伝』。
- (6) 毛谷村六助と論介を関連させた研究は、かねこひさかず「ノンゲ悲話における毛谷村六助」（『国文学解釈と鑑賞』五九巻一号、一九九四年一月）、田畑博子「彦山権現誓助剣」論―毛谷村六助と論介―（『国文学解釈と鑑賞』六一巻五号、一九九六年五月）、崔官「文禄・慶長の役（壬辰倭乱）」（講談社、一九九四年）、川村湊「妓生―もの言う花」の文化誌（作品社、二〇〇一年）、名越二荒之助編「日韓二〇〇年の真実」（国際企画、一九九七年）。
- (7) (5) 同。

写真



(1) 宝寿院内部（英彦山）



(2) 毛谷村六助墓之由来（宝寿院）



(3) 木田孫兵衛墓（毛谷村）



(4) 「かみつの」